

救われたら滅びないのか

ジェイコブ・プラッシュ

● イントロダクション

私は多くの手紙を受け取ります。そして私やモリエルが受け取る否定的な手紙の中には(みなさんがどう思われるかは別として)10ほどの良いものもあります。今週はいつものようにエキュメニカル運動や、特定の種類の教理的間違いや欺きに対して立ち上がっていることを賛同してくれている人たちから手紙を受け取りました。ですがその人たちは「ただあなたはキング・ジェームズ聖書を読まないだろう」や「『救われたら滅びない』を信じていないのだろう」また「宗教改革や改革者たちを高く評価しないだろう」と言います。

私たちはそのような観点で考えません。私はキング・ジェームズ聖書を持っているし、読んでもいます。それひとつだけ持っているというわけではありません。もし聖書を読むなら私は翻訳ではなく、靈感を受けた原語のヘブライ語、ギリシア語、アラム語で読みます。私は原語の重要性をいつも強調しています。それでも誰かがキング・ジェームズ訳を読みたいと思われるなら、私は大して問題を感じません。

ある問題に関して私と違う意見を持っていても、それを特に問題だとは私は思いません。私にとって幼児に洗礼を授けることはおかしいことで、完全に非聖書的だと思っていますが、イエスさまを愛している人で私のように考えない人も知っています。

私は前千年王国説を信じています。聖書をヘブライ的観点から読み前千年王国説以外に行き着くなんてことを私は想像できません。ですがそのように考えない人がいることも私は知っています。マーティン・ロイドジョーンズはそうは考えませんでした。彼は聖書講解を非常に重要視していた説教者でした。

これらのことは私にとって問題ではありません。信仰の必須条件が影響を受けない限り何の問題もありません。これまで何度も言ってきたように、誰かと交わりを絶つものには4つの要素があります。

1. イエスや神の三位一体に関して間違った見解を持っている
2. 悔い改めることのない性的不品行がある

3. 福音の他に(秘跡など)別の救いの道がある
4. 聖書の他に教理的権威を持つものがある

この 4 つの中のひとつにでも当てはまらなければ私は交わりを保ちます。私は福音においてこれに当てはまらない人たちと協力しますが、ある人たちはこのようには考えません。

● 『アルミニウス主義のキリスト』

私の教えを好む人から送られてきた文章があります。私はそれに驚きました。そのタイトルは『アルミニウス主義のキリスト』です。『アルミニウス主義』とは、無条件の『救われたら滅びない』という教えを信じないもので、イエスさまがただ特定の人だけのために死なれたのではなく、すべての人たちを受け入れようとしているという考えです。簡潔にいうとこれがアルミニウス主義です。その人から送られてきたものをここに載せます。

「アルミニウス主義のキリストは世界にいるすべての個人を愛し、すべての人の救いを望んでいる」

これはその通りです。キリストが世界のひとりひとりを愛し、誠実にその救いを願っていると私は信じています。聖書のキリストは神がただ無条件に選んだ者たちだけを愛するものではありません。そう信じる人たちはある聖書箇所を引用しますが、バランスを保っている聖書箇所を無視してしまっています。続けると、

「アルミニウス主義のキリストは罪人すべてに救いを提供し、全力をもって人々を救いに導かれる」

これもその通りです。

「アルミニウス主義のキリストの申し出と働きは、多くの者によって拒まれているため、思うようには進んでいない」

これも聖書的に私には聞こえます。

「一方、聖書のキリストは実質的にただ選ばれた者たちだけを選び出し、その人たちを救いに導き入れる。その人たちはひとりも失われることがない」

この場合でもこの人は自分の考えを支持する聖書箇所を指摘しますが、バランスを取ろうとして

いる聖書箇所に目を向けていません。

「アルミニウス主義のキリストは、自由意思によって最初にキリストを選ばない罪人を更生し、救うことはできない。その自由意思によって人はキリストを受け入れ、拒めるとしている。また自由意思はキリストによって侵害されることはない

本当のアルミニウス主義者はそうは考えません。私たちはキリストを受け入れることが**出来る**が、受け入れるための能力を与えられる必要があると考えています。しかしこの人はこのように考えています。

「一方で聖書のキリストは神の権威をもって、その人の選択とは関わりなく選ばれた者たちを更生する」

この見解では私たちには何も選択がありません。

「アルミニウス主義のキリストは十字架上ですべての人のために死に、すべての人が救われることを可能にしたというが、聖書のキリストは神に選ばれた人だけのために死なれた」

言い換えると、選ばれていない人たちは何か非常に誇張された予定説により永遠に地獄で過ごすよう創造されたということになります。聖書は**確かに**、神がすべてのもの、裁きの日のために邪悪な者たちでさえもご自身の目的のために造られたと語っていますが、神は彼らがむしろ救われることを願っています。

「アルミニウス主義のキリストは自分が救った人たちを多く失っている

イエスキリストは多くの者がつまずくと語りました(マタイ 24 章 10 節)。ある人が言うようにイエスキリストが永遠の保障を与えられたとしても、信仰を失うか失わないかという選択は神の意思や働きによるのではなく、罪人の選択によります。

「聖書のキリストはご自分の選びの民を保たれる」

またこの人は大半のペンテコステ派、ジョン・ウェスレーのような人たちが、カルヴァン主義者のイエスキリストとは同じイエスキリストを信じていないと結論付けました。ジョージ・ホウィットフィールドはカルヴァン主義者であり、ジョン・ウェスレーはそうではありませんでした。しかし異なったイエスキリストを信じ

ているなどという非難は両者から出てきませんでした。ある人は、イエスがすべての人のために死に、主がすべての人を受け入れられると信じている人がいると、その人が異なったイエスを信じているとさえ主張します。

これは『過度なカルヴァン主義』または『超カルヴァン主義』と呼ばれるものです。ある人は極端な道に走り、この点で同意しなければ交わりが持てないといいます。この種の人たちは多くの場合、誰かが『欽定訳(キング・ジェームズ訳)』以外の聖書を読んでいたなら、交わりは持てないとする人たちと同類の人たちです。この種の人たちは誤りに陥り、聖書が『党派心』と呼ぶもの——「私たちは正しくて他の人は間違っている」という考えに陥っています(ガラテヤ 5 章 20 節)。私は分派を起こす者だと非難されますが、それは真実ではありません。私はいつも聖書の根本的真理に立っています。もし誰かが根本的真理から外れ、聖書が語る間違いに陥るなら私は反対します。しかし根本的でない事柄に関して分裂するのは間違っていると私は考えます。それでは分裂の性質について理解しましょう。この分裂とは**個人的な分裂**のことではなく、**神学的な分裂**のことです。

Hyper-Calvinism	Five-Point Calvinism	Four-Point Calvinism	Wesleyan Arminianism	Arminianism	Finneyism	Pelagianism
超カルヴァン主義	五カ条のカルヴァン主義	四カ条のカルヴァン主義	ウェスレアン・アルミニウス主義	アルミニウス主義	フィニー主義	ペラギウス主義

● スペクトルの端から始める

片側の極端としては『ペラギウス主義(Pelagianism)』というものがあります。ペラギウス主義者たちは初代教会時代にブリテン島に住んでいた修道士たちで、ペラギウス(Pelagius)自身はヒッポのアウグスティヌスからの反対を受けていました。ペラギウスが何を信じていたかという、原罪の否定です。彼は人類が墮落しているということを否定しました。私たちは墮落した性質を持っていないため神を自分から選ぶことができるとペラギウスは教えました。聖書から見てこれは真実ではありません。

聖書はアダムとエバの罪による人の墮落のため、私たちが墮落した性質を持っていると教えます。私たちは罪を持って生まれたので、新生する必要があります。ペラギウス主義は完全な異端です。しかしスコットランドや北アイルランドに多くいる極端なカルヴァン主義者たちは、アルミニウス主義がペラギウス主義の一派であると言ったり、ペラギウス主義を薄めた教えであると言います。

ペラギウス主義のすぐ左隣りには『フィニー主義(Finneyism)』があります。それは北アメリカの伝

道者チャールズ・フィニー (*Charles Finney*) から取られた名称です。

チャールズ・フィニーの説教によって多くの人たちが救われたことを私は否定しません。神の超自然的な力のようなものが彼の奉仕には伴っていました。しかし私たちはそのようなものを意見の一致を得るバロメーターとしてはなりません。チャールズ・フィニーは人が墮落した性質を持っていることを否定しました。聖書は私たちが墮落した性質を持つため、新生する必要があると言っています。彼は墮落した性質を否定しましたが、私たちみなが罪を犯したことは認めていました。

● 中庸

この中庸には『ウェスレアン・アルミニウス主義 (*Wesleyan Arminianism*)』があります。アルミニウスは過度なカルヴァン主義に反対していました。アルミニウスの考えが他の国で取り入れられ、偉大なリバイバルistたち、特にジョン・ウェスレーの影響を受けて、イギリスやアメリカ、カナダのような国では『ウェスレアン・アルミニウス主義』と呼ばれました。この考えは人が墮落し、私たちみなも墮落しており、すべての人が神の栄誉から落ちたとします (ローマ 3 章 23 節)。この見解はまた私たちが自分を救うことはできないとします。事実、この見解は私たちがイエスキリストを自分自身で選ぶことさえできないとします。

私たちは自分を救うことはできず、キリストを選ぶこともできません。イエスキリストは『わたしがあなたがたを選び』と言われました (ヨハネ 15 章 16 節)。この見解が私の見解であり、典型的なペンテコステ派が信じてきたことです。私たちは罪のために死んでいます。私たちは主イエスキリストを選ぶことができず、新生することも選べません。それは私たちが罪のために死んでいるため、私たちの霊は神の御霊と交わりを持つことができないからです。神の御霊は交わりを持つために必要な光を与えてくれます。そして墮落の前にアダムが持っていた選択ができる状態を私たちに賜うのです。

● 選択権の回復

アダムは二つの事柄に対して選択を持っていました。それはいのちの木 (主イエスキリストと永遠のいのち) か善悪の知識の木 (この世の木) です。アダムは間違った選択をしました。イエスキリストは『第二のアダム』として来られました (1 コリント 15 章 47 節)。ただ二人の人だけが選択を持っていました。イエスキリストとアダムです。

新約の誘惑の記述 (マタイ 4 章 1 節-11 節、マルコ 1 章 12 節-13 節) ではイエスキリストは園にいたアダムと同じように動物と共におられました。キリストこそ第二のアダムです。サタンはアダムに迫った同じ誘惑をイエスキリストにも仕掛けました。イエスキリストが十字架の元へ行き死なれる前に、アダムと同じように試みを受ける必要がありました。ある意味で、イエスキリストは十字架に向かう権利を得るために試みを

受けなくてはいけませんでした。イエスさまは私たちと同じような者となられたのです。

アダムは選択を持っており、イエスもそうでしたが、私たちは選択権を持っていません。神が誰かの罪を自覚させるとき、神がなされることは自分では不可能な選択を可能にしてくださいことです。私たちはイエスを選ばません——イエスさまが私たちを選ぶのであり、恵みを通して私たちが応答できるようにされます。カルヴァン主義者たちはこれを否定します。(古典的な形態の)カルヴァン主義は私たちが神をどのようにも選ぶことは決して出来ないと主張します。

未信者は罪を犯す他、選択がありません。彼らは罪と死の法則の下にいるため、ちょうど重力に引かれるように**必然的に**罪を犯さざるを得ません。未信者の人たちが選べることは罪をいつ、どこで、どのように犯すかということのみです。信者については神の御霊が私たちの内にあるため、選択を持っており、私たちが罪を犯す必然性はありません。神は私たちに自由意思を戻してくださいました。私たちは御霊に従って歩むか、肉に従って歩むかを選択できます。実質的にカルヴァン主義はイエスが死なれ、死からよみがえり、私たちに新しい性質を与えてくださった回復のわざを否定しています。神は私たちが新生したときに自由意思を回復してくださいます。私たちは生まれ変わる前は自由意思を持っていませんでした。神が息を入れてくださるまで新生することを選ばないのです。これが『アルミニウス主義』です。

● いくつかのカルヴァン主義

ウェスレアン・アルミニウス主義の左隣りには、より穏健な種類のカルヴァン主義があり、それは『四カ条のカルヴァン主義 (*Four-Point Calvinism*)』と呼ばれます。その先には『五カ条のカルヴァン主義 (*Five-Point Calvinism*)』があり、フィニー主義のようにもうひとつの異端の一手前となっています。では『四カ条』や『五カ条』が何を意味するか見てみましょう。

教会の歴史家の中で議論があり、それは「カルヴァンはカルヴァン主義者であったのか」というものです。私たちが考える『カルヴァン主義』はカルヴァンやカルヴァンのキリスト教綱要から来たものではありません。それは『ドルトの抗議書 (*The Remonstrance of Dort*)』から来ました。私たちが知っている形のカルヴァン主義は、カルヴァンの支持者たちが後になってから定義したものです。それと同じように、私たちはウェスレー個人の見解と、ウェスレアン・アルミニウス主義を区別しなければなりません。それはカルヴァン個人の見解と『カルヴァン主義』として知られるようになったものを区別することと同じです。そのドルトの抗議書から出た典型的なカルヴァン主義は、頭文字を取って『TULIP』と呼ばれます。

『**T**』=『**Total Depravity** (全的墮落)』カルヴァン主義とアルミニウス主義はどちらも人が完全に墮落していると考えます。それはどのような意味なのでしょう。完全に墮落しているというのは、体、

思考、霊において墮落しているということです。人は霊的に墮落しきっているので、体でさえも罪に染まっています。その意味で完全に墮落しています。それは6つの卵で作られたオムレツのうち、5つは良いが1つは腐っているようなものです。そうするとオムレツ全体が汚染されています。カルヴァン主義者とアルミニウス主義者はどちらも『全的墮落』に同意します。私たちは自分自身を救うこともできないし、墮落しているのです。しかし問題なのは、人が御霊によって息を吹き返し、御父によってキリストの元に引き寄せられ、神の恵みにより自由意思をもってキリストを選ぶこと、このことをカルヴァン主義者たちが否定することです。彼らにとって人は罪のために死んでいるため、ただの恵みによる救いではありません。彼らはその恵みに応答する選択肢も持っていないと言います。

『U』=『*Unconditional Election* (無条件的選択)』複雑な点はウェスレアン・アルミニウス主義者とカルヴァン主義者の両者が恵みを『受けるに値しない恩恵 (*Undeserved Grace*)』と考える点です。私はそれに完全に賛成であり、ウェスレーも賛同したと思います——神の恵みを受けるに値しないことは私たちみなも賛同します。キリストは不敬虔な者たちのために死なれ、私たちがまだ罪人であった時に死なれました(ローマ 5章 8節)。私たちは救いを行い得ることはできないし、そうできると考えることさえ罪です(また後に説明しますがこれはカルヴァン主義の見解の基礎となっています)。カルヴァン主義者たちがこう考えたのは中世ローマ・カトリックの異端と墮落への反動でした。ですが、少なくともドルト会議以降、カルヴァン主義者たちは『受けるに値しない恩恵』を『無条件的選択』へと再定義してしまいました。つまりこれが予定説の教理であり、神がある人を天国に、またある人を地獄で永遠に苦しめるために意図的に創造したという教えです。この教理について考えてみると、まず初めに救いに関する神の性質を語る多くの聖書箇所と矛盾し過ぎています。神は人々を永遠の責めのために創造されたのではありません(例...1 テモテ 2章 4節、エゼキエル 33章 11節)。

第二の問題は、神が意図的にある人を選択肢も無いのに永遠の責めに渡し、またある人を救いに導き入れることは、福音伝道の必要性和大宣教命令に論理的に矛盾することです。強いて言うならばその予知された者がどのみち救われ、ある者は愛の神によって造られたのに選択肢も無しに永遠の責めを受けることになるからです。神学的、また哲学的にも聖書と異なるこの考えは、純粹に西洋化されたイスラムの教理『インシャ・アッラー (*Insha'Allah*)』と同じです。哲学的にみてカルヴァン主義はイスラム的であり、ユダヤ・キリスト教的ではありません。

これを理解するとなぜ原理主義イスラムの指導者らが清教徒たちを自分たちの仲間として尊敬しているかが分かります。タリバンのようなシーア派またサウジアラビアのワッハーブ派は自分たちのムタワ(宗教警察)を持っていたようにカルヴァンのジュネーブ、清教徒らのイングランドやマサチューセッツも同じでした。その時代に文化に対する弾圧が行われ、劇場や文学、スポーツの代わりに異端者を公に燃やしたり、木に吊るしたり、鞭打ちすることが行われました。これは南アメリカにおける南部バプテストやメソジストによるカルヴァン主義的奴隷制支持につながりました。またそれ

はオランダ改革派教会による南アフリカでのアパルトヘイト(人種隔離政策)、アイルランドにおいては混血の清教徒による農民の強制移住となりました。カルヴァン主義者はそれを『選び(*election*)』と呼び、イスラム教徒は別の言い方で呼びました。ジョン・ウェスレーは奴隷制度に反対していましたが、ジョージ・ホワイトフィールドはこの呪われたカルヴァン主義を支持してしまったがために黒人奴隷を所有し、偉大な神の人であったのに恥ずべき非難を後の時代に残してしまいました。

長老派清教徒たちの戦争ではカルヴァン主義者同士が殺し合いました。またイギリスではクロムウェルとオーウェンのもと非カルヴァン主義者も殺害しました。それはちょうどイスラム教徒がジハードでお互いを『冒涇者』と呼んで殺し合うのと同じです。カルヴァン主義的長老派における女性の地位はイスラムにおけるものとはほぼ同じものです。哲学的にも両者は類似しています。人はその実によって知られるとイエスは言いましたが、カルヴァンのジュネーブからサレムの魔女狩り、奴隷制やアパルトヘイトまで、私たちはカルヴァン主義者たちが『予定説(*predestination*)』と呼び、イスラム教徒らが『インシャ・アッラー』と呼ぶものの実を目にしてきました。イスラム教徒たちはユダヤ・キリスト教的書物をコーランの理解を通して読みます。コーランはユダヤ教とキリスト教、アラブの異教と重なり合ったゾロアスター教の要素を含んでいます。また彼らは5つの柱を基礎とする宗教『ハディース(*Hadith*)』の理解を通してコーランを再解釈します。カルヴァン主義者たちは聖書をカルヴァンのキリスト教綱要の理解を通して読みます。キリスト教綱要は(ローマ・カトリックの主要な教理的創設者である)アウグスティヌスの教父的神学の繰り返しであり、彼らはそれを『TULIP』という5つの原則に従って再解釈します。このような悲劇、背信、愚かさ、偽善はすべて『受けるに値しない恩恵』が間違っって『無条件的選択』と定義されたことに端を発しています。哲学的、また道徳的にカルヴァン主義はキリスト教の装いをしているイスラムに他なりません。

最後の問題は新約聖書の定義する『選び』がイスラエルのような国、また集団としてのキリストの体に関わっていることにあります。カルヴァン主義はローマ9章から11章の文脈を考慮せず、間違っって選びを個人へと適用してしまっています。

● カトリックへの反発

ジョン・カルヴァンは人文主義学者でした。彼の考えはどれも独自のものではありません。彼は力強い性格の持ち主であり、有能な作家でしたが、彼の考えはすべてロッテルダムのエラスムスや、マルティン・ルターなど、第一世代の改革者たちやそれ以前の人文主義者たちから来たものでした。彼はクリスチャンの人文主義者でしたが、それでもなお人文主義を中心としていました。

中世のルネッサンス勃興期、『トマス主義者(*Thomists*)』といい、トマス・アクィナスによって影響を受けた人々によりひとつの異端が生まれました。それは『中世スコラ学(*Medieval Scholasticism*)』というものです。フランシス・シェーファー(*Frances Schaffer*)はこれを分かりやすく説明しました。事

実上ルネッサンス時代に生まれたこの考えは、人は墮落しているが、人の知性は墮落していないというものです(どれほどおかしな考えであることでしょうか)。そして当時の宗教的議論は、人はただ霊だけが墮落しており、**知性**は墮落していないということを軸にしていました。改革者でさえ博愛主義(*Philanthropism*)を完全に否定しませんでした。カルヴァンに影響を与えた人文主義学者たちやカルヴァン自身は、誤りに陥った中世学問と、グノーシス主義的解釈などを正そうと試みました。従ってカルヴァンは人が完全には**墮落していない**とする中世ルネッサンスのローマ・カトリック主義に反発していたのです。

第二の問題は『受けるに値しない恩恵』です。ローマ・カトリック教会の教えは秘跡主義と免罪符の販売でした(このためにバチカンが建設され、宗教改革を引き起こしました)。ルターは「金庫にコインの音がすると煉獄の魂が跳びはねる」と語ったドミニコ会修道士のテツェル(*Tetzel*)に反対していました。これはお金や善行によって救いを得ることが出来るという考えであり、このような考えは未だにイタリアに存在します。年老いた女性が自分の母を煉獄から救いだすためにロザリオを持ち、膝を使って階段——スカラ・サンクタ(聖なる階段)——を上ろうとしているのを見るのは居たたまれないものです。カルヴァンはこのようなローマ・カトリックの腐敗に対抗していたと思われます。

● 脱線の始まり

『**L**』=『*Limited Atonement*(限定的贖罪)』または特別な贖い。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』(ヨハネ 1 章 29 節) イエスは『わたしが地上から上げられるなら、...すべての人を自分のところに引き寄せます』と言いました(ヨハネ 12 章 32 節)。カルヴァン主義はイエスさまが引き寄せることは引き寄せるが、すべての人を救うつもりはなく、引き寄せるのも選ばれた者、予定された者、予知された者だけだと主張します。

神は全知全能です。神を人の知性で描写することは不可能です。もちろん神は未来をご存じであり、誰が救われるかを知っています。またもちろん神の恵みに誰が応えるかを知っておられ、誰が応答するかを知っています——これがアルミニウス主義です。カルヴァン主義者はそうではないと言います。世の基の置かれる前からの書の記された者たちだけが救われるとし、それに例外は無いとします。またその書に名前が無い者は誰も救われず、誰も『閻魔帳』から名前を消し、いのちの書に書き込むことはできない、生まれた時にもう決まっているからというのです。

これはとても悲しい見方ではないでしょうか。エホバの証人は通常の世界より多くの精神病を引き起こしていますが、最も精神病を多く引き起こしているキリスト教のひとつはローマ・カトリックです。アイルランドを例にとるとアルコール依存症や幼児虐待、同性愛的小児愛の数が極端に高くなっています。これらのものはローマ・カトリックに影響を受けた社会心理によって引き起こされています。マリアを原因とするエディプスコンプレックス、アウグスティヌスのマニ教的影響による性の抑圧、こ

これらのものはさまざまな形で表面化しています。ローマ・カトリック教国は非常に高い精神病率やアルコール依存症率を抱えています。今度はもう片方の極端を見てみましょう。

私が神学校にいるとき、そこには北アイルランドやスコットランドでの厳格な長老派の家庭で育った人たちがいました。彼らは一つの極端からまた別の極端へと走りました。ローマ・カトリックでは、人が善行や秘跡によって救われるとするため、救いを得るために労苦し、神経症に陥り、罪悪感のスパイラルに陥ります。また極端なカルヴァン主義は、行いがいい信仰は死んだものであるとあるため(ヤコブ 2 章 17 節)、自分たちが救われている証明として善行をしなければならぬと教えます。「ほら私のしていることを見てくれ、救われているに違いないだろう」というようにです。どちらも救いの確信を本当に与えているようには見えません。**どちらの極端も**人々に救いの確信や本当の平和を心理的にもたらすことはできないのです。

現代のカルヴァン主義は人をおかしくはしません。アイルランド系カトリック教徒の母を持つ者として言えるのですが、アイルランド系カトリックは一種の精神病です。それはハンド派ユダヤ教とも同じです。私はどちらも近くから見てきました。私の家族はユダヤ人とカトリック教徒の混合であり、私はどちらの側も目にしてきました。

『限定的贖罪』はイエスさまがただ特定の人たちだけのために死なれたと言い、そこで止まります。これがカルヴァン主義者の教えであり、アルミニウス主義者はそうは教えません。

『 I 』=『*Irresistible Grace* (不可抗的恩恵)』これは選択肢が無いということです。神が誰かの名前を世の基の置かれる前からのちの書に書いたなら、人は**救われなくてはならず、救われるしかない**——人にはイエスさまを選ぶ能力が無いとします。それだけです。神が私たちを選ばれ、私たちが選んだものではありません。それゆえ、イエスさまが予め定められた応答しかすることができないとします。

『 P 』=『*Perseverance* (聖徒の堅忍)』これが「(無条件に)救われたら滅びない」という教えです。ここに『無条件に』と入れたのを注目してください。私は『救われたら滅びない』という教えに同意しますが、それは条件付きのものであり、無条件のものではありません。

● スペクトルのもうひとつの極端

穏健なカルヴァン主義者は『全的墮落』や『受けるに値しない恩恵』、『不可抗的恩恵』、『聖徒の堅忍』を信じています。しかし、イエスが特定の人のために死に、他の人は地獄に行くために創造されたとする『限定的贖罪』は穏健なカルヴァン主義者なら信じません。一方、五カ条のカルヴァン主義を信じる人はすべての信条を受け入れます。

さらにカルヴァン主義の中でももうひとつの極端と同じような異端があります。それはただの五カ条のカルヴァン主義ではなく、『超カルヴァン主義(*hyper-Calvinism*)』と呼ばれます。それは神が選ばれた者をすでに定めたため、教会は証をしたり、伝道をする必要がないと主張するものです。

私たちは現代これを笑ってくだらないことだと思いますが、これこそが以前のイギリスのバプテスト派を支配していた見解であり、ウィリアム・ケアリー(*William Carey*)がバプテスト集会で立ち上がって、伝道と呼び掛けるまでは実際の考えでした。彼は東洋に宣教師たちを送り、異教徒たちを改宗させようと言いました。それに対する答えは「ケアリー兄弟、まず座って落ち着きなさい。神が異教徒を改宗させようとされるなら、私やあなたの助けはいらないだろう」でした。

またもうひとつの種類の異端的なカルヴァン主義は人の放縦を許します。それは誰かがある時点で信仰告白をしたので(たとえばビリー・グラハムなどの伝道集会に行き、集会で手を挙げ、告白の祈りをしたので)、無条件に「救われたら滅びない」という状態になり、罪を犯し続けても良いとする教えです。大半のカルヴァン主義者たちは、もし人が罪を犯し続けるならそもそも初めから救われていなかったと言います。しかし他の者は信仰を失ってもその人が信仰告白をしたのだから、何も問題は無く、将来救われると言います。彼らの働きだけが燃やされるというのです(1 コリント 3 章 12 節-15 節)。これは異端的です。これは「その人の働きが燃やされる」ことの意味ではありません。それは神によって召されていない肉の行いについてであり、私たちが**救われた**ためにすることではなく、『救われるため』にする行いのことです。ひとりの人がクリスチャンとなり救われると私たちは『**救われるために**』行いをするのではなく、**もうすでに救われた**ために行いをします。当然ながら私たちは主によって召されていない肉による行いやこの世的な行い、ただ一時的な価値だけを持つ行いをたくさんしますが、そのようなものが「燃やされる」のです。

● 極端な『選び』の結果

これら極端な種類のカルヴァン主義は非常に残酷なものとなり得ます。極端な者たちによって採用された『選び』の考えは社会的不公平へとつながりました。極端な超カルヴァン主義がある場所ではただ残酷な社会的不公平があるだけでなく、それらがキリストまた教会の名のもとでなされてきました。ここで私たちが知っておくべき超カルヴァン主義的教会の主要な 3 つの例を見ていきましょう。

ひとつは南部アメリカです。当時の過激な南部バプテストは奴隷制を支持していました。当時バプテスト教会は奴隷制の是非を巡って米国バプテスト派と南部バプテスト派に分裂しました。彼らは「私たちは選ばれた、神に運命づけられた者だ」と言い、黒人を劣った民族だと見なしていました。それは神が彼らをそのように『選んだ』からだということです。彼らはハムの子に関する創世記の一節

を文脈を考慮せず取り上げ、黒人に対してなされることを正当化していました。

北アイルランドを考えてみてください。私よりもローマ・カトリック教会とその異端性を嫌っている人はそうはいません。ローマ・カトリック教会は地獄の産物です。私はローマ・カトリック主義を嫌悪していますが、ローマ・カトリック教徒たちを愛しています。もし私がローマ・カトリック教徒たちを愛していないなら、彼らを地獄に陥らせている教会を今ほどは嫌っていないことでしょう。このようなカトリックへの嫌悪とカトリック教徒への抑圧は全く違うものです。厳格な長老派たちがアイルランドで数世紀にわたってローマ・カトリック教徒たちに行ってきたことは恐ろしいことです。私は当然 IRA (アイルランド共和国軍) やそのようなものを——殺し屋の集まりだと思っていますが——それらに何の愛も持ってはいません。ですがイギリスの大半の人々が知らず、また知ろうともしない裏の歴史が存在し、それらが過激なカルヴァン主義の名のもとで行われてきました。大農園時代の後にはカトリック教徒に対しての多く社会的不公平がカルヴァン主義のために正当化されてきました。

第三のものは南アフリカにおけるアパルトヘイト(人種隔離政策)です。オランダ改革派教会は超カルヴァン主義でした。

過激な種類のカルヴァン主義がある場所にはいつでも抑圧者たちが存在します。カルヴァンはジュネーブで神学的に構成した実質上の警察国家を持っていました。異端を信じているとされた人々は生きたまま焼き殺されました。同じことがスイスのチューリッヒでツヴィングリにより設立された改革派教会にもいえ、彼らはバプテスト派たちを溺死させました。信者の洗礼を信じている者がいたなら、彼らは氷に穴を空けて人を沈めたのです。イギリスでは長老派との悲惨な戦争があり、カルヴァン主義者たちが他のカルヴァン主義者たちを殺害しました。アメリカのマサチューセッツでは人々は魔女を焼き殺しました。過激なカルヴァン主義がある場所にはいつでも不正と抑圧が存在します。その例外を私は知りません。

五カ条を信じる者でも清教徒たちのようにより穏健な種類のカルヴァン主義は、議会制民主主義を設立し、それを聖書的原則に基づかせるなど良い働きをしました。私はただ過激派に反対しています。私は過激なカルヴァン主義に反対していますが、同じようにフィニーやペラギウスなどのもうひとつの極端にも反対します。真実は中庸にあるのであって、それが基本的な状態です。

● みことばからの議論

『私はキリストにあつて真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によつてあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです』

(これがイスラエルとユダヤ人に対する神の救済論的、預言的目的を扱うローマ 9 章から 11 章の序言となっています。イスラエルの大半の者たちがメシアを退けましたが、神の愛は変わりません)

『彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです』

(「彼らのもの」というギリシア語は現在進行形能動態です——神はユダヤ人との関係を終わらせてはいません。またこの文章が紀元 70 年以前に書かれたことも示唆されています)

『父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。しかし、神のみことばが無効になったわけではありません』

(神のみことば＝トーラー)

『なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、』

(言いかえると血統的にユダヤ人であることはメシアを受け入れない限り意味が無いということ)

『アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」のだからです』

(ここからパウロは創世記のミドラッシュ的解説をしていきます)

『すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」このことだけではなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、「兄は弟に仕える」と彼女に告げられたのです。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです。それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおい

てわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と言っています。こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができますでしょう。」しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるのでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。ですが、もし神が、怒りを示して自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです』(ローマ 9 章 1 節-23 節)

この聖書箇所を基にカルヴァン主義者たちは、「神は陶器師で、私たちは粘土だ。誰が神と言いつ争えようか。誰が天国に行き、誰が選ばれた者で、誰が地獄に行くかは神が決めておられる」と言い、もちろんある人たちは「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」という箇所を取り上げて、「わたしは白人を愛し、黒人を憎んだ」また「わたしはプロテスタントを愛し、カトリック教徒を憎んだ」ということを言います。

ジョン・ウェスレーのリバイバルは、カルヴァン主義的思考により死んだ教会が生んだ社会不公平へのアルミニウス主義的反発でした。その時に人々は炭鉱や搾取されている工場から出て来て、数万という数で主に生涯を明け渡したのです。

● 文脈を考慮した本文

上記の聖書箇所を読んでカルヴァン主義者は、「誰が神に言い逆らえるだろうか。神はみこころの通りになされる。威厳をもって息子のひとりをおの道に、もうひとりを別の道に進ませる」こう主張する人の間違っている最初の点は、文脈を考慮せずに本文を読んでしまっているためこじつけとなっているということです。ローマ 9 章から 11 章は主に国々に関する記述であり、個人に関するものではありません。そこではユダヤ人と異邦人の問題が扱われています。パウロは双子の例を引用しました。それではパウロが解説している創世記の記述を読んでみましょう。

『すると主は彼女に仰せられた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。』(創世記 25 章 23 節)

カルヴァン主義者たちが行っていることは、国々に関する記述を個人に当てはめてしまっているということです。ミドラッシュには『カル・バ・ホメル (*kal v'homer*)』——『軽から重』という原則があり、

特定の状況に適用されるものは、『重い』状況にも適用され得るというのですが、私たちはその原則を使う前に文脈を見なければなりません。この箇所は神が人々をこの理由のために、この目的のために造ったと語っているのではなく、**国々の選び**のことが語られているのです。

さらに聖書には『集団共有 (*corporate solidarity*)』と呼ばれるものがあります。それはひとりの人がひとつの国家や集団を表しているというものです。エサウとヤコブはそれぞれ後のイスラエル人とアラブ系諸国を表しています。後にエサウとヤコブは和解しました。創世記で神はユダヤ人と同じようにアラブ人にも預言的な計画を持っておられます。ここでの神の選びは奉仕のためのものです。それゆえ本来第一義的に救いとは関係がありません。

これはオバデヤ書とも同じです。父祖の名がその子孫を表す隠喩、また一般名詞となっていてます。したがって私たちが気付かなくてはならないのは、カルヴァン主義者たちは国々に関して語っている箇所を間違えて個人に当てはめてしまっているということです。この箇所は**ある程度は**——本文がパロについて語っているあたりなど——個人に適用できますが、新約聖書が旧約聖書を解釈しているとき、私たちは旧約聖書の文脈に戻る必要があります。

● 心をかたくなにすることの例

パロは**自分**の心をかたくなにしました。彼は繰り返し、自分の心をかたくなにしていきました。彼が自分の心を何度もかたくなにした後に、神が彼の心をかたくなにしました。神はパロを立てて、パロを用いました。パロは殺人を犯しても見逃され、自分を偉大な者であると思っていました。もちろん、パロはエジプト人により神聖化されており、神として崇拝されていました。神はご自身の目的のため、彼を引き落とすために用いられました。しかし重要なことは、パロが繰り返し自分の心をかたくなにするまで、神が動いてかたくなにはされなかったということです。

『イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを**信じなかつた**。それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼らが**信じることができなかつた**のは、イザヤがまた次のように言ったからである。「主は彼らの目を盲目にされた。それは、彼らが**目で見ず、心で理解せず、回心せず**、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。』(ヨハネ 12 章 37 節－40 節)

信じなければ次第に信じられなくなります。神が誰かの心をかたくなにすることは、**その人自身**の選択の反映です。それはただ神がかたくなにするという問題ではありません。カルヴァンでさえもかたくなにされることのような段階を経ていることを認めていました。

この箇所はヘブライ語の本文からの引用ではなく、ギリシア語旧約聖書の七十人訳からであり、そこでは仮定法が用いられています。ギリシア語の仮定法は可能性を残します——「彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである」悔い改める可能性はギリシア語仮定法ではまだ存在することが示されています。

またこの文脈で「回心する」という言葉が使われています。七十人訳はそのヘブライ語をギリシア語へと翻訳しています。ヘブライ語での「回心」は「テシュバー (*teshuva*)」といいます。ヘブライ語での『悔い改め』と『回心』は同じ言葉——罪から立ち返り、神へ向かうことです。神がその主権をもって任意に誰が何をするかを決めているというのは、とても偏った見方です。聖書はそれとは大きく違うことを述べています。神が人の心をかたくなにするのは、人が何度も繰り返し自分の心をかたくなにするからなのです。神はモーセをパロに何度遣わしたでしょうか？ それではまたさらなる側面を見てみましょう。

● エレミヤ書の陶器師

「神は陶器師で私たちは粘土」これはエレミヤ 18 章・19 章から来ています。パウロが語っていたことをよりよく知るために、旧約聖書箇所を文脈に沿って読んでみましょう。

『主からエレミヤにあったみことばは、こうである』

主からの「みことば」というのはヘブライ語で『ダバール (*d'var*)』であり、ギリシア語では『ロゴス (*logos*)』です。これはイエスご自身がある種の啓示の中で訪れられたということです。それはただメッセージが下ったというものではなく、**人格を持った人が来たようなもの**です。それはラビたちが『ダバール』やアラム語で『マムレ (*mamre*)』と呼び、新約聖書が『ロゴス』と呼んでいるもので、キリストとの個人的な接触です。私たちが御霊にあって聖書を読む時、私たちはただ文章と触れるのではなく、人格と触れます。私たちが本文から得ることは、キリストの人格との接触から来るものです。私たちが今日ただ情報を得ているだけなら、イエスさまからみことばを聞いていません。それはただ私の話を聞くだけになってしまっています。重要な質問は、私たちはイエスさまと接触しているかどうかということです。私たちはその『みことば』か、ただの言葉かどちらと接触しているでしょうか。みことばであるイエスさまと接触しているなら、**みことば**は非常に明瞭になります。

『「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」』

彼はある場所に行く必要がありました。神は陶器師の例から物事を理解する方法を明らかにしようとしてくれました。神は「わたしは今からあることを見せよう」とは言われず、「実例を通して説明しよう」という様に語っていました。

『私が陶器師の下へ行って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。それから、私に次のような主のことばがあった。』

(これは「イエスが語られた」とも言えます)

『「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。——主の御告げ——見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。』(エレミヤ 18 章 1 節－6 節)

「この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか」もう一度考えてもらいたいのですが、神はひとりの個人、それともひとつの国に対して語られているでしょうか。カルヴァン主義者たちは主に集団——国家に当てはめられている箇所を間違っ個人に適用してしまっています。彼らの第二の間違ひは、この陶器師の仕事の仕方を見ていない点にあります。

● 陶器師のやり方

私たちがイスラエルのスタディーツアーに行く時、陶器を粘土から作っていたガリラヤにあるタルムード時代の村によく人々を連れていきます。陶器が上手く出来なければモルタルに砕き、水を入れ、やり直します。ですが再び作った陶器が気に入らないならば次々やり直しますが、素材は変わりません。聖書時代の陶器師は大抵の場合、何度も作り変えるまで諦めはしませんでした。

イエスさまは人々を失うために救いはしません。私たちが十字架を手から落としたり、また拾うことができます。私たちは人生で失敗を犯しますが、イエスさまは諦めません。イエスさまは私たちを幾度も砕かれるかもしれませんが、陶器師がひとつの素材を諦めるには長い時間を要します。それは私たちとても同じです。

人々は自分の救いを失ってしまうのではないかと心配していますが、ここでの陶器師の教えはそういうことではありません。ですがもちろん当然ながら、陶器師が諦める時があります。

● 個人ではなく国家

『わたしが、一つの国、一つの王国について、引き抜き、引き倒し、滅ぼすと語ったとその時、』

明らかに個人に関してではありません

『もし、わたしがわざわいを予告した**その民**が、悔い改めるなら、わたしは下そうと
思っていたわざわいを思い直す。』

(ヨナとニネベの話に似ています)

『わたしが、一つの**国**、一つの王国について、建て直し、植えると語ったその時、もし、それがわたしの声に聞き従わず、わたしの目の前に悪を行うなら、わたしは、それに与えると言ったしあわせを思い直す。さあ、今、ユダの人とエルサレムの住民に言え。『**主**はこう仰せられる。見よ。わたしはあなたがたに対してわざわいを考え、あなたがたを攻める計画を立てている。さあ、おのおの悪の道から立ち返り、あなたがたの行いとわざとを改めよ。』しかし彼らは言う。『だめだ。私たちは自分の計画に従い、おのおの悪いかたくなな心のまま行うのだから』と。』(エレミヤ 18 章 7 節－12 節)

神はもうひとつの国(バビロン)を立てられます。しかしイスラエルが悔い改めると建て直されます。これが聖書がここで語っていることであり、パウロがローマ 9 章から 11 章で語っていたこととまさに同じことです。

『見てごらんなさい。神のいくつしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしきです。あなたの上にあるのは、』

(ここでは主に異邦人の教会に対して語られています)

『神のいくつしみです。ただし、あなたがそのいくつしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。』(ローマ 11 章 22 節)

エレミヤは何と語っているでしょうか。陶器が上手いかなければもう別のものと取り替えると言っています。パウロは何と言っているでしょう。

『彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わせる事ができるのです。』(ローマ 11 章 23 節)

エレミヤ書 18 章は何と語っているでしょうか。『その民が、悔い改めるなら、わたしは、下そうと思っていたわざわいを思い直す』(エレミヤ 18 章 8 節後半)

カルヴァン主義者の教える『陶器師と粘土』の教えはこれとは違います。彼らが聖書箇所を文脈に沿って読んでくれることを私は願いますが、彼らはそうしようとはしません。

● 引用しているものではなく、引用していないものが問題

ここまで来るとお気づきかもしれませんが、極端なカルヴァン主義者たちは自分の見解に合う節だけをいつも用いていることが分かります。(これはエホバの証人ととも同じです。また私たちも気を付けていなければ同じことをしてしまいます)

「アルミニウス主義のキリストは世界にいるすべての個人を愛し、すべての人の救いを望んでいる」

そしてこの手紙の送り主は、聖書のキリストはそうではないと主張し、無条件に選ばれた者たちだけを愛すと言います。それではこの人が引用しようとしないう箇所を見てみましょう。

『主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせているのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです』(2 ペテロ 3 章 9 節)

あるカルヴァン主義者の人が私に「これはただクリスチャンを意味しているだけだ」と言いました。しかし彼らが正しく、「クリスチャンのみ」を意味していたとしても、この箇所にあるようにどのように『救われたら滅びない』状態のクリスチャンが「滅びる」ことがあり得るのでしょうか(これに対して答えはまだもらっていません)。また続く箇所には、

『しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます』(2 ペテロ 3 章 10 節)

この文脈はすべての人に対する世の終わりに関して語っています。主は「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んで」おられます。

『信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました』(1 テモテ 6 章 12 節)

救いは何か獲得できるものであるはずで、それはただ『存在している』だけのものではなく、私

たちが獲得するものなのです。

そしてテモテへの手紙では、主は誰も地獄に行くことを願っておられないことをパウロは語っています。神は人々が地獄に行くのを喜ぶのではなく、人々が救われるのを喜ばれます。一方、パウロがこれを書いたとき、旧約聖書の文脈から多く語っていました。そのひとつがエゼキエル書です。

● 誰も滅びることを望まない

エゼキエルはとても悪い状況のもとで預言していました。もうすでに裁きが始まっていました。そこで神はエゼキエルに、

『わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。もし、正しい人がその正しい行いをやめて、不正を行うなら、わたしは彼の前につまずきを置く。彼は死ななければならない。それはあなたが彼に警告を与えなかったので、彼は自分の罪のために死に、彼が行った正しい行いも覚えられないのである。わたしは、彼の血の責任をあなたに問う』(エゼキエル 3 章 18 節－20 節)

神はここで、またエゼキエル 33 章 11 節で明らかに、悪者の死を喜ばず、むしろ悔い改めを望むことを語っておられます。「滅びないために警告しなさい」と言われます。神はすべての人が悔い改めることを望んでいます。

カルヴァン主義者の友人たちはこれはただ『旧約』での話であって、私たちは新しい恵みの律法の下にいます。それは本当に恵みと言えるでしょうか。

『そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます』(1 テモテ 2 章 3 節－4 節)

神は**すべての人**が救われることを望んでいます！ 神は**すべての人**が救われるのではないことを知っており、御子イエスによる救いを誰が退けるか、また誰が受け入れるかを知っておられます。神は予知され、結果がどうなるかを知っておられます。しかし**すべての人**が救われてほしいのです。理想的には**すべての人**の救いを望んでおられます。

私たちは聖書中のあらゆる事柄について、聖書全体を見る必要があります。そこには最適なバランスがあります。この議論における大きな問題は、私たちが第一世紀の初代信者を見ずに、16世紀の宗教改革者を見ている点にあります。使徒たちの書物を理解し、その適用を知るためには、私たちは第一世紀のクリスチャンの立場に立って考えなければなりません。一方でこの原則は改革派(カルヴァン主義的)神学を見るときにも同じです。カルヴァンは何に反対していたのでしょうか。なぜあのような書き方をしたのでしょうか。明らかにカルヴァンはある種の束縛から人々を解放しようとしていました。

ローマ・カトリック教会は人々に悲しみと罪悪感、恐怖を植え付けていました。そしてカルヴァンはその抑圧から人々を解放するために『救われたら滅びない』という教えを説きました。一方でその教えは結果として、選ばれた者のみというもうひとつの抑圧を生み出しました。それは真理のひとつですが、誤解された真理です。神は誰も失いたいと思っはおられません。

これを支持する聖書箇所は多くあります。

『わたしが地上から上げられるなら、わたしは**すべての人**を自分のところに引き寄せます』
(ヨハネ 12 章 32 節)

『主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせているのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、**ひとりでも滅びることを望まず**、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです』(2 ペテロ 3 章 9 節)

『そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、**すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます**』(1 テモテ 2 章 3 節-4 節)

またエゼキエル 3 章にも、「彼らが滅びないために警告せよ」とあります。

このようなものが根拠となる箇所ですが、次にカルヴァン主義の源泉について理解してみましよう。

● カルヴァン主義のルーツ

カルヴァンは人文主義者でした。その後の時代には『啓蒙主義 (*the Enlightenment*)』と呼ばれる

ものが出てきますが、それは合理主義よりも酷いものでした。科学的思考に変化が生じると技術が変革します。また技術に変化が生じると経済を変革し、経済に変化が生じると文化や政治状況を変え、人々の世界観に変化をもたらします。

ルネッサンスにより、ギリシアとローマの学習法が再発見され、東洋思想が到来しました。それ以前の西ヨーロッパは中世ローマ・カトリックの影響により暗黒時代に入っていました。もしローマ・カトリック世界がどのようなものであるかを知りたいなら、その過去の姿——暗黒時代などを見てください。教皇たちが権力を握るとどうなるかを知りたいなら、過去の惨劇を見てください。彼らは 12 世紀もの間好きなようにしていました。異端審問を見てください。あれがローマ・カトリックです。

例を挙げて説明しますが、昔の物理学はアイザック・ニュートンの考えに基づいていました。それゆえニュートン的な世界観でした。しかしアインシュタインが相対性理論をもたらし、過去の物理学観は見直されました。昔の物理学では物質は物質、エネルギーはエネルギーとして相互排他的なものとして捉えられていました。しかし新生したクリスチャンであるラザフォード (*Rutherford*) という人がイングランドに移り住み、光子の実験を始め、光子が質量——『物質』を持っていることを突き止めました。光子は一種の『波』であり、エネルギーです。ですが質量を持っているとはどのようなことなのでしょう。昔の物理学では物質とエネルギーは相互排他的なものでした。しかし新しい物理学では、私たちがかつて相互排他的だと考えていたものが、ある種の緊張関係の中で保たれていたのです(正反対に見える考えを両方とも同時に認めるということ)。カルヴァンの世界観では相互排他的なこと、それが緊張関係の中で保たれ得ることを理解できませんでした。

最新の物理学において、宇宙は有限でも無限でもなく『臨界性(どちらも可能な状態)』であると粒子物理学者は今日語っています。物理学の世界で明らかになってきていることは、カルヴァンの世界観よりも、多くの点において聖書の世界観に近づいてきていることです。カルヴァンは白か黒、『救われたら滅びない』であり、その説明に合わない者は最初から救われていなかったとします。これは人が選ばれた者に含まれているか、含まれていないかという考え方です。カルヴァンは物事を緊張関係の中に保つことができませんでした。

● 緊張関係の中に保つ

このような考え方はカルヴァンに始まったものではありません。カルヴァンは彼の時代にその考えを拡大し、私たちはそこから出られないでいます。この予定論の考えはアウグスティヌスやペラギウスにさかのぼるものでもありません。それはパリサイ人とサドカイ人までさかのぼります。サドカイ人は『決定論者』——『運命論者』でした。一方パリサイ人は違いました。イエスは大抵の場合パリサイ人と意見を同じくしました。離婚という問題においてだけ、イエスさまは彼らと意見を異にされたようです。イエスさまはパリサイ人よりも保守的な見解を持っていました。しかしながらパリサイ人はサド

カイ人よりも真理により近い者たちでした。

イエスさまは『人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいす』と言われました(マタイ 26 章 24 節)。パリサイ人たちはすべてのことが予知され定められているが、選択は与えられていると考えていました。彼らはイエスさまに同意します(またはイエスさまが彼らに同意されます)。サドカイ人の方が決定論者であり、カルヴァン主義はイエスさまが同意していたパリサイ人よりも、サドカイ人に近いものです。イエスさまはふたつのことを緊張関係の中に保たれました。現代の物理学者たちは光子が質量を持っていることを受け入れますが、100 年前の物理学者には無理でした。カルヴァンは彼の世界観のため二つの事柄を緊張関係の中に保つことができませんでしたが、私たちはそれを**受け入れるべき**です。なぜなら二つの事柄を緊張関係の中に保つことは聖書の世界観であり、現代の世界観だからです。

人間の感情を取り上げてみましょう。墮落のために男女関係を含む人間関係には呪いがあります。結婚は愛と憎の関係ではないでしょうか。「私は彼とは住めない。でも彼無しには生きていけない」というようにです。人間の脳は相互排他的な観点を保ち、どちらも有効にすることができる唯一のコンピューターです。

私はニューヨーク出身です。ニューヨークはロンドンのような場所です。大都会に住んでいる人と話すと大抵の人が「都会が好きだが、同時に嫌いだ」ということを言います。ロンドン住民と話すと、「シアターのあるウェスト・エンドやミュージアム、エネルギーと洗練された雰囲気は素晴らしいよ。だが地下鉄の混雑や犯罪は嫌いだね」ということを言います。私たちは感情的な生き物であるために物事には緊張関係があります。私たちは神の御姿に似せて——『イマジオ・デイ』——造られています。そして神の中にも緊張関係が存在します。私たちは心理的、また感情的に相互排他的な物事に適応できますが、コンピューターはそうではありません。私たちは神の御姿に似せて造られているため、コンピューターではないのです。私たちはコンピューターよりも、神の御姿に似せて造られた人間として考えるべきです。このように物事は緊張関係にあります。

もし私たちの息子や娘が信仰を失ったとしたら、私たちの愛は以前より少なくなるでしょうか。もしかすると彼らが私たちをカンカンに怒らせて、出て行かせたくなるような時があるかもしれませんが、私たちはそうはできません。それが親の現実です。未信の妻や未信の夫——これは私たちが経験する緊張関係です。神も物事を緊張関係の中に保っています。当然ながら神は何が起こるかをすべてご存じであるという違いはあります。カルヴァンは彼の世界観のためこれを受け入れることができませんでしたが、しかし私たちは現代の世界観のため容易に受け入れることができます。

● 彼らが引用しない聖書箇所

カルヴァン主義者は彼らの解釈における選びの箇所を提示していますが、私は神がすべての人の救いを望んでいるという箇所を提示できます。それでは見てみましょう。

彼らの議論の基礎となるべき箇所はどこでしょう。カルヴァン主義者の引用リストでは『限定的贖罪』はなく、ただ『聖徒の堅忍』だけが参照されています。それはある人が救われると、いつまでも救われているという教えです。

ウェスレアン・アルミニウス主義神学が人々に救いの確信を与えられないというのは嘘です。私たちは自分の救いをこの時にも確信することができます。一方極端なカルヴァン主義者で救いの確信を持っていない人もいます。私たちは今救いの確信を持ち得るし、主の道に進み続けると明日も確信を持てます。次の箇所がいつも例として私が用いるものです。

『そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい』(ピリピ 2 章 12 節)

パウロが救いを説明するのに従順さから話し始めているのはなぜでしょうか。

『御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる』(ヨハネ 3 章 36 節)

もし本当に信じているなら行いが伴います。私たちは信仰に従って行動するからです。前述の箇所には「自分の救いの**達成**に努めなさい」とあり、救いを**得るため**に務めなさいとは書いてありません(達成に努めるとはギリシア語で「カテルガゾマイ *katergazomai*」です)。

● 救いの達成

ある時、ドニーという男の子がいました。彼は模型の飛行機を欲しがっていました。それは大きな模型の飛行機で、小さなドニーには買うことのできる金額ではありませんでした。それは 75 ポンドで、ドニーは 10 歳でした。その 75 ポンドをどこから手に入れたらいいのでしょうか。小さなドニーにはこの模型の飛行機を買うことは不可能でした。ドニーは説明書を読んで組み立て、暖炉の棚に飾ってお客さんが来たなら見えるようにしたいと考えていました。しかしその値段は彼の想像をはるかに越えていました。

ですが彼のお父さんは誕生日にサプライズとして、この小さなドニーにその飛行機を買ってあげることになりました。ドニーが包装紙を空けるとそこには箱があり、模型の飛行機が入っていました。小

さなドニーは自分の力では得ることが不可能なものを手にしました。彼自身はその飛行機を手に入れるなんてことはできませんでした。それはドニーの能力を越えていました。プレゼントを受け取ったことでドニーは選択肢に直面しました。箱を開け、飛行機を組み立て、暖炉の棚に置くか、それともただ箱を暖炉の棚に置いて、皆が入ってきたときにその絵だけを見えるようにするかです。

『カテルガゾマイ』は何かを『得るために努める』のではなく、『達成に努める』ことです。

ドニーのお父さんはドニーが自分の力では得ることの出来ないものを与えました。しかしドニーは与えられた物を実行する必要がありました。ドニーはその箱を開け、組み立て、暖炉の棚に置く必要がありました。キリストへの信仰を告白するが、ただ暖炉の棚に置いておくだけという考えはおかしなものです。イエスさまは弟子たちに次のように言われました。

『だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます』(ヨハネ 15 章 6 節)

これはその人の『働き』が燃やされることではありません。それは何らかの信仰告白をしたが、人生で御霊の実を結ばなかった人のことです。私たちのどのくらい行ったかではなく、どれほどイエスの御姿に似たかが問題なのです。

『実』とはもちろん御霊の実です。知恵ある人はたましいを救いますが(箴言 11 章 30 節)、私たちはみな証人です。クリスチャン生活の一部として私たちが活発に証をしていないなら、それは異常であり、聖書を読まなかったり、祈らない、他のクリスチャンと交わりを持たないことのように不誠実のしるしです。私たちはみな証をするべきであり、実をよく結ぶべきです。

それゆえ模型の飛行機が入った箱を渡されたドニーに向かってそのお父さんは言います。「ドニー。それをあげたんだから、ちゃんと完成させるんだぞ」

● 海峡を泳ぐ

もうひとつの救いの見方は、北フランスのカレーから南イングランド・ドーバーのホワイト・クリフまで泳ぐ人に例えられます。強風が来て、泳いでいる人は溺れました。その人は沈み出し、もう泳ぐことができなくなりました。彼は叫びました。「助けてくれ！ 助けてくれ！ 溺れそうなんだ」彼は海峡の半分あたりまで来ていました。彼は北フランスのカレーまで引き返せないし、イングランドまで泳ぎ続けることができませんでした。彼は溺れ始め、雨も降り、嵐が吹き荒れ、波が彼を呑み込んできました。

その時突然、『イエス』という名の書いてあるヘリコプターが空に現れました。そしてそのヘリのハッチが開いて、ひげをたくわえたユダヤ人の男の人が言いました。「助けてほしいのか」

「はい、イエスさま。どうか救ってください。自分の力ではどうにもならないのです」

そこでイエスは、「本当に理解したのかい。本当に私を信頼するのかい？」と言います。

その人は答えて、「はい、イエスさま。イエスさまを頼ります。イエスさま無しでは何もできません！自分を救うことなんてできません。どうか救ってください！救われるためにどうしたらいいのでしょうか」

そこでイエスさまはライフジャケットを取って、それを下に投げて言いました。「それを着けなさい！」

その人はライフジャケットを着ると言いました。「はい、イエスさま。私は今着ました！次に何をしたらいいのでしょうか」

「泳ぎ続けなさい！ ホワイト・クリフはそっちの方向です」

主はその人自身の力ではどうしようもないことを可能にしてくださいました。イエスさまが彼を救ったのです。イエスさまは彼に身に余ること、受けるに値しない事をしてくださいましたが、彼はそのライフジャケットを着て、泳ぐ必要がありました。

誰かが途中で疲れて止まってしまっても、いつでも再開できます。ですがライフジャケットを脱ぎ、フランスの方向に戻ったり、違う道に行ってしまうとどうなるでしょう？ そのような人は溺れてしまいます。この場合は誰の責任でしょうか。

● 自由意思の回復

イエスさまが救いにおいてなさることは、私たちが不可能な選択を可能にしてくださいます。イエスさまは私たちが選択することを可能にされます。イエスさまを選ぶに十分な自由意思を回復していただきますのです。神の究極的な意思に誰も反抗できず、神のみこころはすべての人が救われることですが、神の子となり、自分で神を選ぶことも神のみこころです。私たちは墮落のためにイエスさまを選ぶことができないので、彼は私たちに「息を吹きかけ」——十分な光を与えてくださいました。そこにはバランスがあります。アダムが失ったものを私たちはキリストにおいて取り戻しました。カ

ルヴァン主義はこれを否定します。私たちが自由意思を取り戻していないといいます。ですが私には自由意思を与えてくださいました。

救われることについて選択肢が無いというのは、罪を犯し続けることについて選択が無いというのと何ら変わりがありません。**当然ながら**私は罪についての選択肢を持っています——私は罪を犯す**必要はない**のです。私は罪を犯すかもしれませんが、そうする必然性はありません。救いも同じです。神はキリストを選ぶための恵み、力、手段を与えてくださり、それは自力ではどうすることも出来ないものでした。しかし私はそれを実行しなければなりません。主イエスを受け入れてから、私は疲れてしまい十字架を落としたり、海峡を泳ぐ体力が無くなったりしますが、ライフジャケットを脱ごうとは思いません。私はそれを着続けます。そのライフジャケットを着ている限り、私は安全だからです。『だれもわたしの手から彼らを奪い去ることはできません』(ヨハネ 10 章 28 節)——これは真実です！ 誰も私のライフジャケットを脱がせる人はいません。しかしそうしようとは思いませんが、自分から脱ぐことは可能です。私はむしろライフジャケットと共に沈むことを願います。それなら少なくともいつの日か水面に浮かび上がるでしょう。しかしそれを脱ぐことは可能です。ライフジャケットを着続けている限り、私は永遠の保障を持っています。それがイザヤが『救いの衣』と呼ぶものです(イザヤ 61 章 10 節)。私たちは永遠の保障を持つことができます。

● ヘブル人への手紙の例

ヘブル人への手紙を見てみましょう——これは信者たち、特にユダヤ人信者たちに向けて書かれたものです。その手紙ではメシアとしてのイエスへの信仰から外れ、律法の下に戻っていくことへの示唆があります。これはヘブル人への手紙というよりガラテヤ人への手紙で扱われている内容です。ガラテヤの信者たちは一種の『ノミアン主義(Nomianism)』を行っていました。彼らは律法によって救われたという律法主義者ではなく、**イエスへの信仰に加えて**、律法を守ることによって救われたと主張する者たちでした。私たちはただイエスのみにより救われました。また行いによって救われたのでも決してありません。クリスチャンが良い行いをするのは**もうすでに**救われたからであって、**救われるため**ではありません。それでもなおこの手紙はユダヤ人信者たちに向けて書かれたものであり、何らかの方法でユダヤ教に戻る危険性がありました。ですがこれはガラテヤ人の場合とは少し違います。私はこの手紙を原語のギリシア語本文を解説し、英語(または日本語)の翻訳を添えていきます。

『ディオ・アフエンテス・トン・テース・アルケース・トゥー・クリストゥー・ロゴン・エピ・テーン・テレイオテータ・フェローメサ・メー・パリン・セーメーリオン・カタバロメノイ・メタノイアス・アポ・ネクローン・エルゴーン・カイ・ピステオース・エピ・セオン。バプティスモーン・ディダケース・エピセセオース・テ・ケイローン・アナスタセース・テ・ネクローン・カイ・クリマトス・アイオーニオン』

『ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、きよめの洗いについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう』(ヘブル 6 章 1 節-2 節)

このようにヘブル人への手紙の著者は書いています。著者はもうすでに救われた人に関して、どのように基礎を据えるべきかを教えています。しかしその直後にその上に建て上げられるべきものについて語っています。著者は文章の始めをギリシア語の『ディオ (*dio*)』、『そのため』という意味の言葉で始めています。それはこれらのことがもうすでに起こったので、次に進もうという意味です。そのような文脈で著者は語っています。

『神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力を味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです』(ヘブル 6 章 3 節-6 節)

4 節の『ガール (*gar*)』という単語も『そのため』を意味します。ギリシア語の態は仮定法や条件付き仮定法ではありませんが、何かが悪い方向に行く可能性を示唆しています。これはほとんど起こる可能性のない仮定法ではなく、条件的なものです。しかし文章には続きがあり、『そういう人々を...立ち返らせることはできません』——『アドゥナトン (*adunaton*)』とあります。これはヘブル人への手紙 6 章 18 節にある『神は...偽ることができません』と同じ言葉、不可能であるということです。そのような人が立ち返ることが不可能であるということは、もしその人たちが立ち返ったならば同じ言葉が使われているために、神を偽ることになります。神が偽ることができないように、このような人たちが立ち返るのも不可能なのです。ですが、これは一体どのようなことを語っているのでしょうか。

● 立ち返ることのできない者たち

人々が立ち返ることのできない罪は唯一ひとつ、聖霊を冒瀆する罪です。その文脈において、聖霊を冒瀆する罪は神のわざだと知りながらサタン働きとしたイエスの時代のパリサイ人や宗教指導者たちと関連しています。彼らはそれが神のわざだと知りながら、そう考えようとしませんでした。マタイにあるぶどう園のたとえでははっきりと、『自分たちをさして話しておられることに気付いた』とあります(マタイ 21 章 45 節)。それゆえ彼らは神のわざだと分かっていました。ですがそう知りながらも、神のわざをサタンの働きだと言い、他の者たちを救いの道から妨げました。これは相当墮落しています。これは誰かが何かを神のわざだと知りながら、自分の利益のためにそう言わず、他の者

たちを真理から遠ざけ、破滅に陥れることです。それがこの文脈における赦されることのない罪です。

私たちはどの時点で聖霊が人の元を去るかが分かりません。背教者はいつ背教したのかを自分で分かりません。サウル王が墮落したとき、御霊が去ったことを気付いていなかったのをご存じでしょうか。ですが彼は預言し続けました。それは神の賜物と召命とは変わることがないところからです(ローマ 11 章 29 節)。御霊は御霊の降り注ぎという点から言うと彼の上にあったかもしれませんが、彼のうちに御霊はおられません。かの日には「主よ、御名によって私たちはあれもこれもしたではありませんか」という人でも「あなたがたは全然知らない」と言われる人たちがいます(マタイ 7 章 21 節-23 節)。私たちはいつの時点でそれが起こるかが分かりませんが、信仰を失い、イエスさまに立ち返ることを拒み、聖霊を冒瀆するまでに至る人が存在します。

聖霊は背教者を繰り返し、**繰り返し**罪定めをしています。人が主から墮落したとき、彼らには主のうちに平安はなく、祈りにも平安がなく、どの行いにおいても平安を欠きます。ですが人はそれでもなお反抗し続けます。そのような人は最終的に救われません。彼らは戻れない地点まで行ってしまったのです。これは起こる可能性があります。

これは容易なことではありませんが、本当に墮落してしまい、真理を知ってはいるが、妻が子どもを教会に連れて行くことを反対する人たちがいます。夫や妻でも、本当に墮落してしまい、真理だとは知っているがその真理から子どもを遠ざけている人たちがいます。これはひどい罪です。これと聖霊を冒瀆する罪を関連付けることも可能です。

● 光を受けた

『一度光を受けて』——『フォティスセントラス(*photisthentas*)』がそのギリシア語です。それは『光を見た』や『光に來た』という意味であり、何か抽象的なことではありません。**はっきりと見た**ということです。

『アドゥナトン・ガール・トゥース・ハパックス・フォティスセントラス・ゲウサメヌース・テ・テース・ドレアス・テース・エプーラニオン・カイ・メトフース・ゲネセントラス・ニューマトス・ハギオン』
(ヘブル 6 章 4 節)

『一度光を受けて天からの賜物 [*doreas*] の味を知り、』

天のような経験をしたというのではなく、天そのものです

『聖霊にあずかる者となり(——あずかり続けている者)』

これは彼らが聖霊にあずかる者と『なった』のではなく、なり続けている(現在進行形能動態)ということです。そうなるには『御霊』の結果である必要があります。

このように実際に聖霊を経験し、行き先である天に触れた人が信者でない可能性はありません。それは信者に関することであり、実際に救われた人のことです。彼らは光の元に来ました——『フォティスセントス』、『光は見た』(使徒 22 章 9 節)、『すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた』彼らはイエスさまの元に来たのです。

● 味わった

イエスの元に来たことの結果として『味わう』ということが起こります。ギリシア語では「ゲウサメヌース・セウー(*geusamenous theou*)」——「彼らは良きものを味わった」という意味です。この箇所は基本的に詩篇 34 篇 8 節を引き合いに出しています。

『主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。』(詩篇 34 篇 8 節)

これらの人たちは主のすばらしさを実際に味わいました。

ヘブル人への手紙 6 章を続けて読んでいくと、主を味わった者はギリシア語で『セウー・レーマ(*theou rema*)』——彼らは『ことば』を味わったと出てきます。それは『ロゴス』ではなく『レーマ』です(6 章 5 節)。新約聖書のギリシア語では神の『ことば』には二つの基礎単語『レーマ』と『ロゴス』があります。その二つは実質的に同義語です。私たちはある人たちがしているような区別を付けられません。ある人は『ロゴス』が記された言葉であり、『レーマ』は何か御霊からの個人的な啓示であると言います。これは正しくありません。私たちが言うことができるのは『ロゴス』が客観的なものであるということです。聖書は神のみことばであり、イエスさまがそこに記されてあります。しかし『レーマ』は経験的な現実となったものであり、私たちの人生で真理となったものです。イエスさま——彼こそが『ロゴス』です。ロゴスが私たちに到達し、個人的な方法で聖書が生きたものになること、それがこの箇所の言葉で示されていることです。ヘブル人への手紙 4 章 12 節には『ロゴス・トゥー・セオー(*Logos tou Theo*)』とあり、著者はヘブル人への手紙 6 章につなげています。『神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く』(ヘブル 4 章 12 節)しかし前述の箇所での言葉は『ロゴス』ではなく、みことばとの個人的な接触です。

言い換えると、ギリシア語とヘブライ語を完璧にわきまえている神学者でも、新生していないとい

うことがあり得るということです。彼は何らかの形で『ロゴス』を持ち得ますが、その『ロゴス』は彼の人生で個人的な経験となっていません。『レーマ』はなく、本当の啓示もなく、ただ純粹に知的なもので終わってしまっています。そのような人の手にある聖書は役に立ちません。神の御霊を内に持つ者が聖霊に『あずかった』者です。これがヘブル人への手紙の著者がここで語っていることです。誰かが聖霊に『あずかった』者となったならば、個人的な真理であるそのロゴスは『レーマ』となるのです。

● あずかった者

このような人は何らかの個人的な経験を持ち、イエスへの信仰を実際に持った者たち、『あずかった者たち』——『メトフース・ゲネセンタス (*metochous genethentas*)』です。ルカ 5 章 7 節に登場するこの単語は多くの場合聖書で『仲間 (英語では *comrades*)』と訳されます。言い換えると彼らは私たちの仲間となった者、私たちの中にいた者のことです。それは私たちの輪の外にいた者たちのことではありません。彼らは救われ、『天からの賜物』——『テース・ドレアス・テース・エプーラニオン』にあずかりました。

この単語はこの特別なフレーズでは聖書に一度しか登場しません。それは恵みを意味する『カリズム (*charism*)』ではなく『ドレア (*dorea*)』です。神の恵みはある意味ですべての人のためのものと言えます。神はすべての人、未信の人たちにも寛大です。しかしこれは『カリズム』、その種類の『恵み』ではありません。これは『ドレア』であり、救いの賜物です。これは神の偉大で、言葉に言い表すことのできない真理の知識による救いの賜物です。これは神がすべての人に与える一般的な恵みを越えるものです。

私がこれを指摘した理由は、カルヴァン主義者たちがカルヴァンのキリスト教綱要から議論して、この箇所はその人たちがキリストの道をずっと歩んでいたのではなく、ただ部分的に知っていたに過ぎないと主張するからです。ですがこの本文はそのような考えを支持してはいません。カルヴァン主義者たちは多くの人を使う手口を使っています。彼らは自分たちの前提から始め、その前提に合うように本文をごまかすのです。ですが文脈においてもその考えは退けられます。これらの人は主を確かに知っていた人たちなのです。

● 墮落した

そしてこのヘブル人 6 章の箇所にはそのような人たちが墮落したとあります。6 節から悪い方向へと話題は向かいます。この『墮落』、または落ちたという言葉は『アポスタシア (*apostasia*)』ではありません。『アポスタシア』はまた違うものです。これは違う言葉で、ギリシア語の条件節の分詞で表された『パラペソントス (*parapesontas*)』です。そしてその単語は以下の議論とは反対のものです。

対象となっている人はユダヤ人信者で、ヘブル人への手紙の著者はユダヤ教へ戻ることは不可能だと語っているとする意見があります。そのユダヤ教への回帰が不可能なのは他の場所にはいけにえが無いためであり(ヘブル人への手紙 10 章での説明)、今ある場所に留まっていなければならないと語っているとします。ですが私たちがその箇所を文脈に従って読むと、誰かが墮落し得ないということを語っているのではない事が分かります。しかしある人たちはこのような議論を押しつけようとしています。

もしその単語が『アポスタシア』なら話は別ですが、『アポスタシア』ではなく『パラペソントス』です。『パラペソントス』は全くそれと違います。『パラペソントス』とは「**一定の基準から落ちること**」です。『アポスタシア』は全く違うギリシア語から派生しています。『アポスタシア』のギリシア語の語根は『離れる』という意味です。誰かがここにいたが、今去ってしまったというものです。ですが、この『墮落』という言葉が表すことは、もう信じないことではなく、信仰に従って生きるのを止めてしまった者のことです。

彼らの議論は、これはユダヤ人信者たちに対して書かれたもので、第一世紀のユダヤ人信者に語っているのであって、ユダヤ教への回帰は望みが無いため墮落は不可能で(神殿が崩壊直前であったなど)、今の地位に留まる他ないというものです。その人たちはこの手紙が神殿崩壊前に書かれたため、ユダヤ人信者と神殿崩壊に適用されるのであって、それがユダヤ教への回帰を妨げ、信者が救いを失うことではないとします。もしそれが本当なら、その単語は『アポスタシア』——『離れる』が使われているはずですが、実際はそうではありません。この箇所は「**同じ基準をもって生きていない**」ことを意味します。それはかつてクリスチャンの生活をしていたが、その信仰から離れたことを意味します。彼らはその生活に歩んでいないということです。これは文脈にぴったり合います。ヘブル 6 章は『ですから...初歩の教えをあとにして(英語...*leaving*)』という言葉で始まります。

ある人がクリスチャンになってから 10 年、20 年、または 50 年経っているのに未だに『ベビーフード』を食べているとすると、それは異常であり、不健康です。クリスチャン生活でより恵み深くならず、聖書の知識や理解において成長せず、神に性格を変えられ、神の似姿、またイエスの似姿に近づかず、いつも同じ様である人たち、そのような人たちは実際は背教者です。私が子供の頃、ボブ・ディランの歌があり、その歌詞は「生まれ変わり続けていない人は、死に急いでいる」と歌っていました。実際の生活もそのようなものです。私たちは前進していなければ、後退しています。

ここで『墮落した』と訳されている言葉は『アポスタシア』ではありません。これは信仰から離れた人を指しているではありません。これは「私はもう聖書やイエスを信じない」と言う人のことではありません。『アポスタシア』はその意味ですが、ここでの言葉はそうではありません。その言葉は「私は信仰から離れていない——まだ信じている」状態でありながら、その信仰に生きていないということ

です。

そして信仰に生きないことにより、そのような人は救われる前よりも悪い種類の罪に陥ります。私たちは主に会いながら、同じ人であり続けることはできません。私たちはより良くなるか、より悪くなるかどちらかです。誰かがイエスに会ったなら、その人はより良くなるか、より悪くなるかのどちらかです。救われていながら同じままでいることはできません。主を味わい、聖霊にあずかる者となり、天の前触れを経験しながら、同じ人であり続けることはできません。人はより良くなるか、より悪くなるかのどちらかです。

この箇所(6章6節)で使われている言葉は『アナスタウルーンタス(anastaurountas)』——『再び十字架にかける』という言葉です。これはキリストがなされたことへの侮辱を表しています。誰かがひとつの基準を掲げていたのに、その基準を信じていると言いながら離れたなら、その人は信じる前よりも悪い状態に陥ります。これは背教者に関して語っています。

● 不注意による罪と故意の罪

ギリシア語の意味を詳細に見てきたところで、またいつものように見てみたいと思います。

『一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、』(ヘブル6章4節-5節)

(再び読んでみるとキリストのようではないでしょうか)

『しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません』(ヘブル6章6節前半)

ある人が信じた後に墮落したなら、その人は悔い改めて立ち返ることができません。ギリシア語は英語のように現在形というものがなく、現在進行形能動態だけがあります。第一ヨハネ3章9節には神から生まれた者は罪を犯さないとありますが、その箇所はクリスチャンが罪に陥らないと言っているのではなく、罪に陥り続けないという意味です。

著者はユダヤ人に向けて書いているため、トーラーのレビ記的精神を引き合いに出しています。トーラーは不注意の罪に対して備えをしていましたが、継続される故意の罪に関しては備えをしていませんでした。レビ記は不注意の罪に関して解決の道を備えていました。

『罪』という言葉はヘブライ語にもギリシア語にも各々二つあります。ヘブライ語の罪に関する二

つの基本単語は『ヘット (*chet*)』と『ペシヤ (*pesha*)』です。前者は弓矢で標的を狙うように『標的を外すこと』であり、文字通りには『十分達さない』という意味です。後者は『遠くに行きすぎる』という意味です。私たちは神の基準に達さないか、それを越えてしまうことにより罪を犯します。ギリシア語の同義語は『ハマルタノ (*hamartano*)』と『ハマルティア (*hamartia*)』です。

レビ記は不注意による罪に猶予を与えています。それはヘブライ語では『バルット (*barut*)』といいます。贖罪日の大祭司は無知によって犯された罪の贖いをしました。しかしトラーの下であっても、故意に罪を犯し続ける人に対しては赦しは備えられていませんでした。

『一度光を受けて』

(彼らはイエスを見ました)

『天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで』

(彼らは確かに**味わ**いました)

『しかも墮落してしまうならば』(ヘブル 6 章 4 節-6 節)

誰も自分がいたことの無い場所から落ちることはできません。

この箇所に関するもうひとつの議論はジョン・カルヴァンのキリスト教綱要第 3 巻、2 章、11 パラグラフにあります。カルヴァンが言うには、この人たちはただかすかな光を見ただけであって、福音の説教を聞き、理解をし、真理を知ったが、表面的な意味で味わっただけであり、完全な献身には達さなかった人のことだといいます。

まずそもそも、この議論は本文が語っていることではありません。それはただ『かすかな』光を見たという意味ではありません。この本文を文脈に沿って読むと、これらが真理を知っていた人であることが分かります。私たちは救われない限り、4 節の『ドレア』——我らの主イエス・キリストからの永遠の命という『賜物』を受け取ることはできません。誰も救われない限りは不可能です。カルヴァンはこの点で完全に間違っています。(訳者注...同じ『ドレア』が使徒 11 章 17 節で救いに関して用いられている。『こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ**賜物**を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができましよう』)

先に触れたように、過激なカルヴァン主義は放縦な生活に至らせることがあります。それは一度本当の献身をしたなら、罪を犯し続けても良いとするからです。このような考えは多く見受けられるわけではありませんが、信じている人は確かにいます。私はこの教えを教えている人を知っています。

● 終わりの日における背教者

ヘブル 10 章ではこの墮落という問題を終末論という文脈の中で、また教会論と関連付けて語っています。

『ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますさうしようではありませんか』(ヘブル 10 章 25 節)

この箇所は『カル・バ・ホメル』、ミドラッシュにおけるラビ・ヒレルの第一原則です。軽い状況で真実なことは、重い状況で**特別に**真実となります。言い換えると、交わりは**いつの時でも**重要ではあるが、終わりの日に**特に**重要となるということです。私たちが共に立てないなら、ひとりで立つことは不可能です。このように見ると、終わりの日には背教する危険性が**特に大きくある**ということが分かります。イエスさまは人々が**大ぜいつまづき**、互いに裏切り、憎み合いますと言われました(マタイ 24 章 10 節)。背教はいつの時でも起こり得ますが、終わりの日においてより大きな問題をもたらすものとなります。

背教に関する神の経綸において、交わりは非常に重要なものです。それはクリスチャンが互いを支え合い、セメントで固められたように共に立つことです。他のクリスチャンと交わりを持っていない人は主との交わりから外れています。その人には何か間違ったところがあります。たとえひとつの家に 5、6 人が集まっても、または教会に 500 人や 600 人集っていても問題ではありません。本当に重要なのは、神がどこにいることを望んでおられるかです。私たちの力の及ばぬことや、自分のせいでないもの(たとえばサウジアラビアの村はずれで唯一のクリスチャンである場合)などは別です。神ご自身がその信者たちの世話をされます。しかし私たちのような者が、交わりから外れているとしたら、その人は問題に巻き込まれていっています。

● 『グノーシス』と『エピグノーシス』

上記の箇所の次に 10 章 26 節が来ているのは偶然ではありません。

『もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけには、もはや残されていません』(ヘブル 10 章 26 節)

『ことさらに』という言葉は『ヘクーシオース(*hekousios*)』です。著者は再び故意の罪に対して備えは無いとするレビ記の概念を引き合いに出しています。

ここで注目すべきこととして『もし私たちが』——『ヘーモン(*hemon*)』と語り、著者は自分をその状況に置いていることです。このヘブル人への手紙の著者は他の人に語っているだけでなく、自分自身にも言い聞かせています。

『真理の知識を受けて後、...罪のためのいけには、もはや残されていません』

『真理』は『テース・アレーセイアス(*tes aletheias*)』であり、ここでの『知識』という言葉は通常の『グノーシス(*gnosis*)』ではなく『エピグノーシス(*epignosis*)』であり、私たちが物事について真理の**ひとつ**を知っているのではなく、真理の**総体**を知っているという意味です。これはクリスチヤンの生活や救いの一つの側面だけを理解した人のことではありません。これは全体像を理解した人に関する記述です。

人が誰かに「イエスは私たちの罪のために死なれ、永遠のいのちを与える」と聞いたなら、その人はその事実を『知る』ことができ、それが『グノーシス』です。しかし誰かが、「イエスは私たちに共に死ぬように、また死者の中からよみがえられたように新しい人となるように語られた」、また「御霊が私たちのうちに住み、肉の欲に打ち勝つ力を与えられる」と言い、さらに「聖書は誤りなき神のみことばであり、聖霊がそれを解釈し、そのために生きれるように力を与えられるので、私たちはその基準に従わなければならない」——救いはこのようなものをすべて含むものだとする人が語るならば、その人はただ『グノーシス』を得ているのではなく、『エピグノーシス』を得ています。

このような人はただ福音について何かを知ったり、聞いただけでなく、本当に理解した人です。そして彼らは真理の総体——『テース・アレーセイアス』を知ったのです。

● 戻れなくなる地点

『ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい』(ヘブル 10 章 27 節-29 節)

『御霊を侮る』というフレーズに注目してください。それは人が聖霊を冒瀆する罪に至ることがあ

るということです。悔い改めない背教者は聖霊を冒瀆する地点まで到達します。それがこの箇所のことです。この箇所が未信者についてであると主張するには何らかのごまかしが必要です。『踏みつけ』という言葉は『カタパテオ (*katapateo*)』であり、『汚れたものとみなし』——『コイノン・ヘゲーサメノス (*koinon hegesamenos*)』はイエスの血を普通のものと見なすことです。ここで侮るとある言葉は『エヌブリゾー (*enubrizo*)』であり、神の御霊を侮辱することです。

そうです、赦されることの無い罪は確かに存在します。ヘブル 6 章と 10 章は、悔い改めない背教者が、聖霊を冒瀆する状態にまで行き着くことを教えています。ヘブル 6 章は悔い改めない背教者が聖霊を冒瀆する可能性を教えており、ヘブル 10 章は同じ点について、実際にそれが起こることを教えています。

戻ることのできない地点が存在します。陶器師の例に戻ってみましょう。陶器師は陶器を砕き、作り替え、砕き、また作り替えますが、陶器師でも次第に諦める時が来ます。これは人を落胆させるための聖書箇所ではなく、私たちが乗り込んだもの、また神が召されていることを軽く受け取らないということを教えています。それは主から『離れること』——『アポスタシア』ではありません。その箇所の言葉は主の基準から離れることです。ユダの手紙の全体のテーマは教会内にいる背教者についてです。教会内には教会外と同じくらい多くの背教者がいます。墮落している者の心は自分の道で満ちていると聖書にはあります(箴言 14 章 14 節)。

ヘブル 10 章 28 節では、モーセの律法で死刑を執行する際に「二、三人の証人のことば」を必要とすると語られています。旧約の者たちが持っていなかったものをクリスチャンは持っているため墮落した場合状態はより酷いものとなります。法を破るという言葉は『アセテサス (*athetasas*)』です。『考えてみなさい(そう思わないのですか)』という言葉は『ドケイテ (*dokeite*)』でありギリシア語の修辞法です。修辞法的な質問を聞くというのは、相手がすでに答えを知っているということです。もしあのようなことがイエスやイエスの血をも持っていないモーセの律法の下にある人たちに起こったのなら、私たちがその道に行ってしまったならどうなってしまうのでしょうか？ 著者は警告を与えていますが、そこで止まりはしません。彼は忍耐の必要性を説き始めます。

● 忍耐を伴う確信

『あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です』(ヘブル 10 章 36 節)

どのように忍耐したらよいのでしょうか。ライフジャケットを着けて、泳ぎ続けることです。

「ですが私たちは信仰によって恵みを通して救われたのではないのですか」とある人は言うでし

よう。それは真実ですが、信仰とはどのようなものでしょうか。それはヘブル 11 章 1 節にあります。『信仰は望んでいる事がらを**保証**』——『ヒューポスタシス (*hupostasis*)』するものです。

聖書における『希望』は『将来の事実』と同等です。イエスに従い続けるなら天国に行けることを私は保証します。ライフジャケットを脱がなければ溺れないことを私は保証します。私は溺れないことを『望む』のではなく、ライフジャケットを着続けると溺れないことを保証します。イエスに従い続けられれば天国に行くことは保証できます。これが永遠の救いの確信を得る方法です。しかしこう考えなければ私たちは火遊びをしてしまいます。また今日実際に火遊びをしている人たちがいます。

ジョン・カルヴァンが言うように、この箇所はただ福音を聞き、ある点まで来たが引き返してしまった人のことであると私たちは言うことはできません。単純にそうではないからです。その人たちは『ドレリア』を持っていました。またこの箇所はユダヤ人信者が律法の下に戻る事が不可能だと語っているのでもありません。それは**墮落し得る**人、神の基準から離れ**得る**人のことです。この箇所を間違えて解釈する人は聖書箇所を遊んでおり、本文の語っていることを率直に受け取らない人です。

● 帰属された義

カルヴァン主義者は義が私たちに帰属されたと言います。それでは『**帰属** (*imputation*)』という言葉を理解しましょう。それは興味深い単語です。

『それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまらるべきでしょうか』(ローマ 6 章 1 節—2 節)

パウロは帰属された義が誤解され得ることを理解していました。実際、ギリシアの教会には新しい性質だけが重要で、古い性質は問題ではなく、古い性質によって罪を犯し続けても良いと信じる人たちがいました。パウロはその誤解が起こる危険性を知っており、人が罪を犯し続けながら、救われているというような考えを持つ可能性を知っていました。パウロの書いたことを見てください。これは信者に向けて書かれています。そこで無条件の『救われたら滅びない』の教えを信じる人たちは、「もし人が墮落して、罪を犯し続けたなら、その人は初めから救われていない。本当は新生もしなかった。彼らはただ偽りの告白をし、何らかの経験をしたが、本当は救われていなかった」と言っています。ですがこれはヘブル 6 章とヘブル 10 章に矛盾する見解です。

放蕩息子のたとえを見てください(ルカ 15 章 11 節—32 節)。放蕩息子のたとえの解釈は幾通りもあります(ラビたちはひとつのたとえは七十の解釈を持っていると語りました。これは『複数の』という意味です)。放蕩息子の解釈のひとつは背教者についてのものです。背教者は放蕩息子と同じ道をたどり、信仰の辱めを受け、父の元に戻って来ます。そして背教者が戻って来る時、御父は

その人を赦し、連れ戻しますが、それでもその人自身が帰って来なければなりません。そしてそのたとえで父親は何と言っていたでしょう。『おまえの弟は、死んでいた』(ルカ 15 章 32 節)。彼は確かに死んでいたのです！

『どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです』(ローマ 4 章 10 節)

帰属という考えに戻ってみると、パウロはローマ 4 章で『エロギステー (*elogisthe*)』という言葉を用いています。私たちはラテン語ウルガタ訳の『インピュタット (*imputate*)』から英語の『インピュート (帰属される)』という言葉を得ています。ヘブライ語では『考える』を意味する『ハシャブ (*chashab*)』です。『帰属させる』というのは『そう見なす』ということです。私たちに実際に『与えられた』わけではないが、そう『見なされて』いるということです。神はそれを私たちのものと見なされました。

イエスが私たちの罪のために十字架で死なれた時、神は私たちの罪を彼に着せ、私たちはイエスの義を与えられました。イエスが義なる方であったのに、十字架上において不義が彼に帰属されたのです。私たちは不義なる者たちですが、十字架に来る時、イエスの義が私たちに与えられます。アブラハムは神を信じ、それが彼の義と見なされました(ガラテヤ 3 章 6 節、ヤコブ 2 章 23 節)。それでは義が帰属されたことは分かりましたが、御霊の実はどうでしょうか。御霊の実は帰属させられることはありません。私たちは自分たちがイエスの弟子であることを証明するよう召されています。

● 勝利を得る者

『勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい』(黙示録 3 章 21 節-22 節)

天国に行くには『勝利を得る者』である必要があります。もちろん私たちは自分たちの力や自分たちの義では勝利を得ることはできません。イエスさまの義と力によらなければなりません。イエスさまがすべてを行ってくださるからです。自分の力で嵐の中の海峡を泳ぐことは不可能ですが、ある方がライフジャケットを与えてくれました。その方から力を与えられたため、私たちは実行に移さなければなりません。それはちょうど小さなドニーの飛行機のようにです。天国は勝利を得る者のための場所です。神は勝利を得るための恵み、意思、手段を与えてくださいます。また私たちに自由意思をも賜ります。私たちは救われると自由意思を回復します。

『自分の着物を洗って、いのちの木の實を食べる権利を与えられ、門を通過して都に入れる

ようになる者は、幸いである。犬ども、魔術を行う者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行う者はみな、外に出される』(黙示録 22 章 14 節)

「着物を洗う者は幸いだ」着物を洗う人もいれば、聖書には着物をまた汚してしまう人もいます。私たちはいつでも小羊の血に戻って私たちの着物を洗うことができます。しかし比喩的に着物を脱いでしまうと、イエスさまが捕らえられた時に裸で逃げた青年のようになります(マルコ 14 章 51 節 - 52 節)。迫害が来たときに彼は逃げ、救いの衣を失ってしまいました。

黙示録 2 章の七つの教会に戻ってみると、『勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない』とあります(黙示録 2 章 11 節)。著者はここで新生したクリスチャンに向かって書いています。クリスチャンに対して語りながら、勝利を得る者は第二の死によってそこなわれることはないと言ったのです。信者たちが墮落してしまう可能性が神学的に存在することは明らかです。

『勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す』(黙示録 3 章 5 節)

イエスは実際、人の名前をいのちの書から消すと言われました。そもそもいのちの書に初めから名前が書かれていないなら、論理的にどうやって消すことが可能なのでしょうか。ある人は救いに、ある人は地獄に定められていると信じる人たちは自分の前提を持ち込み、聖書箇所をごまかさなくてはなりません。

● 実行に移すよう召されている

『役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出なさい。そこで泣いて歯ざしりするのです』(マタイ 25 章 30 節)

私たちは一定のタラントを与えられています。また私たちのタラントは必ず自分の能力に比例するものです(マタイ 25 章 15 節)。イエスさまが戻って来るとタラントを埋めた者には満足されません。投資家が最も高い報酬を受けるのであって、最低限、利息を得た者でない限りイエスさまは満足されません。自分のタラントを埋めた者は実際は背教者です。彼らは真正のキリスト教ではなく宗教を信奉しています。あなたや私がイエスさまとの関係の中で生きているなら、イエスさまは私たちのタラントを用いられます。

私は何年もイスラエルのコングリゲーションを率い、伝道活動に非常に活発的でした。一方で私は昼の仕事も持っていました。イスラエルの平日は 6 日間です。仕事と家族を持ち、奉仕を行うの

は容易いことではありませんでした。その困難さは分かっていたのですが、神がくださった恵みと意思のためそれを実行でき、私はその恵みと協力する選択をしました。

本当に多くの牧師が講壇に立ってあれこれしなさいと言いますが、自分たちがそこで給料をもらっていることを忘れていきます。そのような人たちは会社に行ったり、夜中に起きたり、工場に行くような生活を知りません。私は何年も何年も天幕作りであったことを神に感謝しています。もし長距離を移動することがなければ、今でも天幕作りであったことでしょう。私は世俗の仕事を持つことを選びます。ですが本当に大切なことは実を結ぶことです。パウロは牢獄にいらながらも実を結んでいました。

『そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け』(1 コリント 10 章 1 節－2 節)

● レッスンを学ぶ

パウロがここで出エジプトの経験を用いて、私たちの救いを説明しています。出エジプトはこの世から出ることであり、海を通ることはバプテスマのことです。出エジプトは私たちの救いの象徴です。

『みな同じ御霊の食べ物を食べ、みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかかわらず、荒野で滅ぼされました。これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拜者となつてはいけません。聖書には、「民が、すわっては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。また、私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう。彼らは姦淫のゆえに一日に二万三千人死にました。...これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです』(1 コリント 10 章 3 節－8 節、11 節)

これらのことが古代ヘブル人に起き、聖書に記されたのは私たちが同じ間違いを犯さないためです。彼らの行ったこととはキリストである岩から飲みながら、偶像崇拜者であり、不品行であったことです。なぜ私たちは彼らにならないよう警告を受けているのでしょうか。黙示録 22 章 14 節から 15 節には何とあったのでしょうか。そこには不品行な者や偶像崇拜者が外に出されているとあります。彼らは地獄に行くのです。これが新約聖書の語っていることです。

● 抑圧から抑圧へ

カルヴァン主義者らが聖書から無条件の『救われたら滅びない』という教えをどうやって得たかは私は分かりません。もっともらしい説明は、ローマ・カトリックの嘘、人が救いを得るために良い行いをし、いつでも救いを失い得るといふ恐怖の中に閉じ込めた教えを否定しようとしたのでしょう。彼らがそのような抑圧から人々を自由にしようとしたのを私は理解できます。しかし彼らは正反対の極端に向かい、救われるか救われないかは人が選べないとし、人々をより重い抑圧の下に置くこととなりました。

人々が自由意思を持たず、新生した時に自由意思をイエスさまから与えられず、(本当は神さまは正しいことを選ぶ恵みを与えられているのに)もしあなたが選ばれた者のひとりではなく、イエスさまを選べないとしたなら、その結果は人々をより重い抑圧の下に置くこととなります。さらに信者を罪の抑圧の下へと人々を導きます。それは未信者と違い、更生された信者が与えられた自由意思により、罪に対抗することができないとするからです。

イエスさまは私たちが**罪の中で**救われたのではなく、**罪から**救われました。イエスさまは**罪の中で**救うために来られたのではなく、**罪から**私たちに救いに来られました。

人が罪を犯し続けながら、しかもそれを悪いことだと認め、「私はこの未信者の女性と暮らし続ける」や「アルコール乱用を続けていく」、また「このような生活を続けていくが、日曜日には教会に行き続ける」このようなことを言うなら、その人は罪から救われておらず、自分たちが罪の中で救われていると思い込んでいます。聖くなることなしに、神を見ることはできません(エペソ 1 章 4 節、5 章 27 節、1 ペテロ 1 章 15 節)。

『ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いますか』(ヤコブ 2 章 20 節)

● 結論

小さなドニーの模型の飛行機はそれを組み立てるまで意味を成しません。ライフジャケットもそれを着て、泳がなければ意味を成しません。救いは賜物であり、無償のものです。それを自分の力で手に入れることもできません。そうです、主は私たちが自分では不可能なことをしてくださいました。そして主は私たちを選ばれ、受けるに値しない恩恵を示されました。しかし主はまた私たちが持っていなかった選択する力をも与えてくださいました。私たちは死んでいて、神と交流を持っていませんでしたが、神が私たちに息を吹きかけられました。そして私たちに墮落の時に失った光、十分な光

を与えられ、主が真理であり、救いであることが見えるようにされました。それに応答するかどうかは私たち次第です。これがバランスです。

ペラギウスのように私たちが罪を持って生まれていないとするのは異端です。チャールズ・フィニーは私たちが罪を持っているとしながらも、その異端の一步手前に立っていました。私たちはすべてが罪を持っており、罪のために神を選ぶことさえできません。しかし主はイエスの人格を通して仲介され、私たちには不可能であった選択する能力を与えてくださいました。**私たちは選ばなければなりません。**私たちがその選択をすると、イエスさまはその生活を実行する力も与えられます。しかし**私たちがまず決断しなければなりません。**

私たちは墮落のために自由意思を失いました。アダムからすべての人が自由意思を失っていたのです。イエスはそれを回復しました。カルヴァン主義はこれを否定します。

尊敬するカルヴァン主義者や改革派教会の兄弟のみなさん、私は改革派クリスチャンが過去に行ってきた、また現在行っている多くの素晴らしいことに敬意を払い、ピルグリム・ファーザーズや清教徒の父祖たちも愛しています。しかし永遠の保障の問題となると私たちはキリストにあって永遠の保障を得ているという見解に賛成します。ただその永遠の保障の中に**留まる**ようにしてください。

神の祝福がありますように。†††